

## はじめに

本書は、総合地球環境学研究所で実施している「環境変化とインダス文明」という研究プロジェクトに関連して、インダス文明研究の基礎資料の一つとして作成したものである。

このプロジェクトは、前3千年紀後半に南アジア北西部を中心に展開したインダス文明に焦点を当て、広く文明社会と自然環境の相互作用環を理解する手掛りを模索することを目的としている。このプロジェクトの代表は言語学者である長田俊樹・総合地球環境学研究所教授で、参加する学問分野としては、考古学、言語学、文化人類学、宗教学、インド学、自然地理学、地質学、植物学、動物学と多彩である。さまざまな視角からインダス文明社会とそれを取り巻く諸環境を考察し、その成果を文明社会と自然環境の相互作用環という軸によって統合するという構想である。

インダス文明には文字が存在しているが、未だ解読されておらず、その実体を研究するのは考古学である。インダス文明の成立から展開、その終焉にいたるまでの過程を考古学の手法を用いて研究する分野をインダス考古学と呼ぶことにしよう。このインダス考古学の出発は1920年代のモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の発掘調査に求めることができる。すなわち、研究が始まって90年近くになる。

インダス考古学は、インド・パキスタン分離独立以前はイギリスを中心とする欧米研究者によって、1947年の分離独立以後はそれにインド・パキスタンの研究者が加わって進められてきた。日本でも特に1960年代以降、関心が寄せられてきた。その結果、各地に膨大な研究成果が蓄積されて今にいたっている。

その一方で、インダス考古学が対象とする資料あるいはデータの公表・共有は決して順調ではなく、論文先行型の研究が優先されてきたことは否めない事実である。結果として、研究に弊害を引き起こしている部分もある。それはインダス文明とは何かという根本的な問いかけをも困難にしてしまっている。

本書は発掘調査が実施された遺跡の一覧を中心とするが、上記の学問的弊害を乗り越えて、インダス考古学を推進していくことを目的とした基礎的な試みである。なかには発掘調査が実施されていながらどのような資料が得られたのか情報が大きく欠落する遺跡も少なくない。そうであってもそれらの遺跡を集成によって研究の俎上に引き上げ、今後の研究の基礎としていくことには一定の意味があろう。本書は決して十分なものではないが、インダス考古学の現状を概観し、今後の研究の展望を描く手掛りとして活用していただければ幸いである。

\* \* \*

本書ではインダス文明期を中心とする前後の時代を「先インダス文明期」「インダス文明期」「ポスト・インダス文明期」と呼ぶ。欧米や南アジアにおいては「先ハラッパー文化期 (pre-Harappan period)」「ハラッパー文化期 (Harappan period)」「ポスト・ハラッパー文化期 (post-Harappan period)」あるいは「後期ハラッパー文化期 (Late Harappan period)」(Wheeler 1968 など)、または「先都市期 (pre-Urban phase)」「都市期 (Urban phase)」「ポスト都市期 (post-Urban phase)」(Possehl 1999, 2002 など)、または「地域文化の時代 (Regionalization Era)」「地域統合の時代 (Integration Era)」「地方文化の時代 (Localization Era)」(Shaffer 1992) といった用語が用いられるが、ここではインダス文明社会がハラッパー文化のみで構成されるわけではないことを重視し、「ハラッパー文化」を文明社会全体に敷衍するような呼称は避けることとした。

ハラッパー文化は確かにその要素の一部が文明社会各地に分布するものの、その母体はシンド地方およびパンジャブ地方西部に存在すると考えられる。各地の地域文化がハラッパー文化によって一つの文明社会システムとして統合されたのは一面では事実であるが、ハラッパー文化のみでインダス文明社会を説明できるわけではない。

また、「都市」の存在を重視した時期区分概念においては、各地に展開した都市の成立および衰退の時期が明確ではなく、各都市によってその形成・衰退・廃絶時期に時間的差異が存在する可能性も十分に考えられることから、適切な表現ではないと判断した。ただし、インダス文明の成立を何によって画するかという問題は決して容易ではない。都市の成立と独自のインダス印章・文字の創出を一つの基準として考えているが、両者が同時に生じたかどうかは不明である。そもそもどのような様態をもって都市成立とするかについても十分な調査データや議論がなく、曖昧としたままである。今後の研究課題として措かざるを得ないが、問題を明確にして議論の俎上に上げていくことが今後の研究において重要であろう。

なお、「初期ハラッパー文化期 (Early Harappan period)」については「初期インダス文明期 (Early Indus period)」(Allchin and Allchin 1982) と呼ぶことも可能だが、都市や印章、文字が初期ハラッパー段階においては確立しておらず、「文明期」の一部として「初期インダス文明期」と呼ぶのは必ずしも適切とはいえない。「初期ハラッパー文化期」という名称にも問題を残すが、ここではそのまま採用することとした。

\* \* \*

本書で取り上げたのはインダス文明に関連する遺跡であるが、実際に集成作業を進めると、どこまでがインダス文明に関連する遺跡であるのか判断に困ることが多い。一般的にインダス文明期の遺跡としての認定には、ハラッパー文化の要素の存否が基準となる。極端にいうと1点でもハラッパー式土器が出土すればインダス遺跡として認定されることになる。

逆にハラッパー文化の要素が存在する遺跡の近傍にあっても、ハラッパー文化の要素が確認されなければ、インダス遺跡にならない場合もある。

ハラッパー文化を構成する文化要素のうち、広域に分布しインダス遺跡としての認定に有用なものとしては、土器のほかに、インダス式印章、ローフリー産と推定される褐色チャートを素材とする石刃石器、重量計測用の立方体形おもりなどがある。ただし、すべての遺跡でこれらの遺物がセットで出土するわけではなく、単体で出土する場合もある。

さらに問題はインダス文明期以前と以後の時代に関してである。インダス文明の成立過程には文明期以前の諸文化が重要な役割を果たしたことが知られるが、その過程に役割を果たした地域文化の範囲をどこまで広げるかによって、関連遺跡の数は増減する。それは文明期においても同様であって、極言すると、西はメソポタミアから東は北インドのガンガー平原まで、北は中央アジアから南はアラビア半島までがインダス文明に関連した地域となり、そこに存在する遺跡はすべてインダス遺跡ということになってしまう。文明衰退以後の時代においても、どこまでをインダス文明の影響が及んだ時代あるいは地域とみなすかという問題がある。

文献史料が存在しない時代・地域において、そこに存在した社会あるいは文化の範囲を画定することは考古学の方法論において難しいところである。上述の通り、かつてはハラッパー文化の要素が分布する範囲をインダス文明の展開した空間として理解していたが、文明社会がきわめて複雑で重層化した社会＝空間構造をもつことを前提にしたとき、このような認定手法は私たちのインダス文明理解を著しく単純化させてしまう危険性がある。

本書では、こうした認識上の危険性を念頭に置きつつ、より直接的にインダス文明社会の成立から衰退に関与したと考えられる地域範囲として、アフガニスタン南部から、バローチスタン高原、インダス平原、パンジャーブ平原、ガッガル平原、カッチ湿原、サウラーシュトラ半島までを想定した。現在の行政単位としては北部山岳地帯を除くパキスタン全域、アフガニスタン南部州、インドではジャンムー＝カシュミール州、パンジャーブ州、ハリヤーナー州、ラージャスターン州、グジャラート州を主とし、文明期以降に関してはウツタル・プラデーシュ州西部とマハーラーシュトラ州北部の遺跡も加えた。本書では以上の地域を広義にインダス地域と呼ぶこととする。

時代的には前4千年紀から前2千年紀中葉までを設定した。この時間幅でインダス文明の成立から衰退までの過程を最低限理解することができると判断したためである。ただし、遺跡によっては、その前後の時代に言及する場合もある。以上の条件のもとで存在する遺跡をインダス遺跡と呼ぶことにしよう。

付言しておく、こうした研究の対象とする時代・地域をいかに設定するかという問題は、私たちのインダス考古学研究の視座にも深く関わってくる。どのような視点から研究を進めるかによって、取り扱う範囲もしくは着目する範囲は異なってくるであろう。国境のなかった時

代を研究するにあたって、現在の国境線にわたしたちの認識が影響を受けてしまう場合も往々にしてある。南アジア考古学あるいはインド考古学と呼んで、研究地域を自明のごとく限定してしまうことも多い。こうした問題は研究を深化させていくなかで不断に自問すべき課題であり、自ら視野を狭めていくようなことだけは回避する必要があるだろう。

\* \* \*

インダス・プロジェクトでインドの研究機関と共同で発掘調査を実施したカーンメール遺跡、ギラーワル遺跡およびファルマーナー遺跡については、現在報告書の作成を進めているところであり、本書では取り上げていない。カーンメール遺跡はグジャラート州カッチ県に所在する遺跡で、先文明期からポスト文明期にかけての遺跡である（さらに歴史時代の文化層も存在する）。ラージャスターン州ウダイプルにあるラージャスターン・ヴィディアピートのラージャスターン研究所考古学科との共同調査を2005年度から開始し、2008年度まで4ヶ年にわたる発掘調査を実施した（発掘隊長 J.S. Kharakwal 准教授）。一方、ギラーワル遺跡とファルマーナー遺跡はハリヤーナー州ローフタク県に所在し、ギラーワル遺跡では先文明期の集落址を、ファルマーナー遺跡では文明期に形成されたマウンドと墓地において発掘調査を実施している。デカン大学考古学科との共同調査で V.S. Shinde 教授を調査隊長とする。詳細については、すでにプロジェクトで出版している *Occasional Paper: Linguistics, Archaeology and the Human Past* に概報を公表しているのでそちらを参照されたい（Kharakwal *et al.* 2007, 2008; Shinde *et al.* 2008a, 2008b）。

また、ローフタク大学歴史学科と共同で、ポスト文明期からその後の彩文灰色土器文化期にかけてのマディナ遺跡についても、調査報告書の作成を進めている（Manmohan Kumar *et al.* 2009）。この遺跡についても本書では取り上げていない。

本書に収録した遺跡以外にも、さまざまな機関によって現在発掘調査が進められている遺跡がある。また、近年調査が行われたが、概報もしくは報告書がまったく刊行されていないものもある。随時、何らかの手段で本書のデータを更新していきたい。

\* \* \*

本書の構成について述べておくと、第1章ではインダス考古学が抱える問題点を総括し、第2章から第4章はそれぞれインド、パキスタン、アフガニスタンのインダス遺跡の一覧である。一覧には、発掘調査によって得られた遺跡の概要、発掘調査機関、所在地および緯度・経度、発掘調査年度、そしてその遺跡に関連する文献を項目として上げた。

遺跡の名称をカタカナで表記するにあたっては、インドもしくはパキスタンの現地での発音

に近づけるよう意を払ったが、現地で確認できなかったものも多い。現地での表記および発音のローマ字アルファベット表記にもさまざまな置換の法則があり、ローマ字アルファベット表記のみでは正確な発音とならない場合も数多くある。より正確な発音で表記することは、遺跡に与えられた地名がもつ由来の正しい理解にもつながるので、今後改善すべき課題である。

発掘調査機関については、調査担当者がわかる場合は併記し、機関名のみが判明した場合は機関名のみでの表記としている。研究者の人名については正確な発音かわからない場合が多くあることから、ローマ字アルファベットでの表記とした。

遺跡の緯度・経度については、その数値を網羅的に集成した先行研究として G. Possehl の '*Indus Age: The Beginnings*' (University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1999) があるが、その数値で Google Earth に表示してみても本来の遺跡の地点と相当のずれがあるなど、問題が散見される。そもそもこの研究書に挙げられた緯度・経度は主にインド・パキスタン人研究者が分布調査の際に大縮尺の地形図をもとに割り出した数値を引用したものと考えられるが、当初の段階での誤差も含まれている可能性が高い。

そこで本書では原典で確認できたものはその数値も併記することとし、さらにインダス・プロジェクトで実施した分布調査の際に GPS で位置情報を記録した遺跡の場合は、その数値も併せて示すこととした。また、GPS による位置情報がない遺跡でも Google Earth で遺跡の位置が確認できた事例については、その数値も掲載している。位置情報は遺跡の空間分布研究を進める上で不可欠の基礎情報であり、より精度の高い記録手法が必要とされる。今後、いかに Possehl らの情報を検証していくか、大きな課題である。

発掘調査年度については、インド・パキスタンでは例えば 2009 年度の調査を 2009-10 と表記するケースが多い。インドでの事情について記すと、インド政府考古局から調査申請者・機関への許可の交付が 11 月から 12 月で、翌年の 9 月まで有効とされる。結果として、調査年度の表記が 2009-10 のように 2 ヶ年をまたぐかたちとなっている。ただし、本書では表記の便宜上、2009 年に許可が出された調査については、それが 2009 年度内に行なわれていようと 2010 年 4 月以降に実施されていようと、2009 年度の調査として表記することとした。各年度に付した文献はその年度の調査の成果を中心的に紹介したものである。

参考文献は (1) 主として発掘調査成果を公表したものと (2) 遺跡出土の個別資料について分析・検討を行ったもの、に分けて掲載した。中には、直接調査と関わらない論文も含む。

なお、本書で用いた略号の正式名称は以下の通りである。

ASI = Archaeological Survey of India

ASIAR = *Archaeological Survey of India - Annual Report* (ASI, New Delhi)

IAR = *Indian Archaeology - A Review* (ASI, New Delhi)

本書は長田俊樹教授が収集していた遺跡に関する情報に、上杉が補足を加えた上で編集したものである。遺跡の写真については、上杉が撮影したもののほかに、長田俊樹教授、宗墓秀明氏（鶴見大学）、小磯学氏（神戸夙川学院大学）、遠藤仁氏（総合地球環境学研究所）、Ute Franke 氏（Museum für Islamische Kunst, Berlin）、Roland Besenval 氏（Centre national de la recherche scientifique/Délégation archéologique française en Afghanistan）、Randall Law 氏（University of Wisconsin-Madison）、Vivek Dangi 氏（Maharshi Dayanand University, Rohtak）より提供を受けた。また、小茄子川歩氏（デカン大学大学院）および木村聡氏（東海大学大学院）には文献収集において助けていただいた。みなさんのご厚誼に感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- Allchin, F.R. and B. Allchin (1982) *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge University, Cambridge.
- Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2007) “Kanmer: A Harappan site in Kachchh, Gujarat, India”, in T. Osada (ed.) *Occasional Paper 2: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.21-46.
- Kharakwal, J.S., Y.S. Rawat and T. Osada (2008) “Preliminary observations on the excavation at Kanmer, Kachchh, India 2006-2007”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.5-23.
- Manmohan Kumar, Vasant Shinde, Akinori Uesugi, Vivek Dangi, Sajjan Kumar and Vijay Kumar (2009) “Excavations at Madina, District Rohtak, Haryana 2007-08: A Report”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.77-177.
- Possehl, G.L. (1999) *Indus Age: The Beginnings*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia
- Possehl, G.L. (2002) *The Indus Civilization: A Contemporary Perspective*. Altamira Press, New York.
- Shaffer, J.G. (1992) “The Indus Valley, Baluchistan and Helmand traditions: Neolithic through Bronze Age”, in R. Enrich, (ed.) *Chronologies in Old World Archaeology*. University of Chicago Press, Chicago. pp.441-464.
- Shinde, V., T. Osada, M.M. Sharma, A. Uesugi, T. Uno, H. Maemoku, P. Shirvalkar, S.S. Deshpande, A. Kulkarni, A. Sarkar, A. Reddy, V. Rao and V. Dangi (2008a) “Exploration in the Ghaggar Basin and excavations at Girawad, Farmana (Rohtak District) and Mitathal (Bhiwani District), Haryana, India”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.77-158.
- Shinde, V., T. Osada, Manmohan Kumar and A. Uesugi (2008b) “A Report on Excavations at Farmana 2007-08”, in T. Osada and A. Uesugi (eds.) *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto. pp.1-116.
- Wheeler, R.E.M. (1968) *Early India and Pakistan to Ashoka*. revised edition. Thames and Hudson, London.